

# IUHW



2022年度IUHW奨学金授与式にて謝辞を述べる医学部3年生のチュオン・コン・フィさん

特集  
1

第12回 国際医療福祉大学学会学術大会

特集  
2

感染症対策のなか各キャンパスで開催！ 大学祭特集

2022年度IUHW奨学金授与式

モンゴル国立医科大学 創立80周年記念共同医療シンポジウム



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

# 第12回国際医療福祉大学学会学術大会 私たちはどこへ行くのか 大川キャンパスで初開催

第12回国際医療福祉大学学会学術大会(大会長:外須美夫国際医療福祉大学副学長<九州地区担当>)が8月28日(日)、大川キャンパス101大講義室をメイン会場に開催された。大川キャンパスでの学会学術大会の開催は、キャンパス開設以来初めて。昨年開催の成田キャンパス同様、対面とオンラインのハイブリッド形式で行われ、対面で114人、オンラインで185人が参加した。

今大会のメインテーマは「私たちはどこへ行くのか」。開会式で、外大会長は「本学特任教授である木村伊量先生の著書『私たちはどこから来たのか 私たちは何者か 私たちはどこへ行くのか—三酔人文明究極問答』ミネルヴァ書房、2021年>を読み、感銘を受けて名づけたもので、コロナ禍で試練に向き合う医療・福祉や教育、そして社会がどうなるのかを一緒に考えていく機会にしたい」と今大会の意義を語った。

今年は315演題のエントリーがあり、特に優れた優秀演題8本が口述発表されたほか、2本の教育講演、2本の特別講演、シンポジウムなどが行われ、多岐にわたる問題提起や未来への示唆が得られる充実した内容となった。会場で熱心に耳を傾ける参加者の様子から、関心の高さがうかがわれた。



●優秀発表者表彰

## 激変の対応には「多様性」

鈴木康裕学長は「2025年の創学30周年に向けた本学のこれから」と題して、特別講演を行った。この中で鈴木学長は関連施設が充実している本学での共生社会の実現、多職種連携、留学生の多い本学の国際性などを強調、これらの底流にある「多様性」が環境の激変に対応できる強靭性を発揮できると強調した。



●開会式の外学術大会長



●特別講演をする鈴木学長



●松本主任教授のオンライン講演

もう一つの特別講演は木村伊量大学院特任教授が「『ポスト・コロナ』時代と文明の行方」と題して、グローバル化とコロナ禍、細菌、ウイルスは根絶すべき相手かなどをテーマに、人間はどう考えていくべきか、示唆に富む話題を取り上げた。

## 新型コロナへの対応進む

コロナ禍、テレビでも解説者として活躍する松本哲哉医学部主任教授の教育講演Iの演題は「新型コロナウイルス感染症の行く末」。オンラインでの講演で、当初治療薬やワクチンという有効な手段がない状態で立ち向かわなければならなかったが、mRNAワクチン、レムデシビルや抗体薬、内服できる治療薬などができると同時に、感染対策も進み、「新型コロナに、しっかり立ち向かえるようになった」と総括。近い将来には「インフルエンザのようにどの医療機関でも検査ができ、重症化リスクがない人にも内服薬が処方可能になり、年1回のワクチン接種で有効性が維持できる新規ワクチンの開発ができる必要がある」と期待を込めて見通しを述べた。

教育講演IIは「難病に挑む」と題して、吉良潤一大学院トランスレーショナルニューロサイエンスセンター長が、難病の定義、その治療の現状や、患者さまを取り巻く環境などを報告。新しい指定難病アトピー性脊髄炎の発見と病態の解明、多発性硬化症のグリア炎症のメカニズム、多系統萎縮症の新規モデル開発と病原性ミクログリアの発見と「難病の謎を紐解く分子の探究」について説明し、「ぜひ、センターで難病の新しい治療法を開発したい」と締め括った。

シンポジウムのメインテーマは「これからの教育はどう変わるのか」。薬学、保健医療学、看護学、医学の各分野の教育環境の変化を踏まえた今後の課題がそれぞれ報告されたが、「コロナ禍にSNSを駆使するデジタルネイティブ世代の学生と、それを理解していない教員の意識の乖離が広がっている」と現在の教育現場の変化に教職員側に警鐘を鳴らした医学部臨床実習ディレクターの岸拓弥教授の報告が目をつけた。



●シンポジウムの岸教授

## 学術大会プログラム内容

### ■優秀演題口述発表I

- 座長:福岡保健医療学部医学検査学科長 永沢 善三
- 「COVID-19パンデミック下における看護師の蓄積疲労とストレス対処に関する研究」  
福岡国際医療福祉大学 看護学部 看護学科 生駒 千恵
- 「難治性自己免疫疾患に対するRP105陰性形質芽B細胞を標的とした新規治療法の開発」  
福岡保健医療学部 医学検査学科 小荒田 秀一
- 「造血器腫瘍細胞による骨髄微小環境の破綻メカニズムの解明」  
福岡保健医療学部 医学検査学科 澁田 樹
- 「PD-L1の可溶性分画と癌再発・ビタミンDの摂取との関連」  
国際医療福祉大学病院 消化器・乳腺外科 鈴木 範彦

### ■優秀演題口述発表II

- 座長:福岡保健医療学部長 廣岡 良隆
- 「胃ESD時における胃液pHと潰瘍治癒遅延における因子の検討」  
国際医療福祉大学病院 消化器内科 須藤 大輔
- 「先天性QT延長症候群(LQT3)の分子基盤に関する研究」  
薬学部 薬学科 角南 明彦
- 「根治を目指すToll様受容体4刺激抗体による食物アレルギー予防・治療戦略」  
福岡薬学部 薬学科 塚本 宏樹
- 「バイオ3Dプリンターを用いた、間葉系幹細胞からの骨様立方構造物作製への挑戦」  
福岡薬学部 薬学科 梶岡 俊一

### ■教育講演I

- 「新型コロナウイルス感染症の行く末」※リモート動画  
演者:医学部 感染症学 主任教授、  
国際医療福祉大学成田病院 感染制御部 部長 松本 哲哉  
座長:大学院医学研究科教授 矢永 勝彦

### ■教育講演II

- 「難病に挑む」  
演者:大学院医学研究科・トランスレーショナルニューロサイエンスセンター長、福岡薬学部・薬学科教授、  
福岡中央病院 脳神経センター長 吉良 潤一  
座長:大学院副学長 藤本 一真

### ■特別講演I

- 「創学30周年に向けた本学のこれから」  
演者:学長 鈴木 康裕  
座長:大学院長 三浦 総一郎

### ■特別講演II

- 「『ポスト・コロナ』時代と文明の行方」  
演者:大学院 特任教授 木村 伊量  
座長:副学長 外 須美夫

### ■シンポジウム

- メインテーマ「これからの教育はどう変わるのか」  
「SNSとCOVID-19がもたらした平成世代若者の変化～先生方の講義、学生は聞いていますか?～」  
演者:大学院医学研究科・循環器内科学教授、  
福岡薬学部・薬学科教授、医学部・臨床実習ディレクター  
岸 拓弥



●会場全体の様子

### 「薬学教育」

演者:福岡薬学部・薬学科教授 永倉 透記

### 「保健医療学科の教育」

演者:成田保健医療学部副学部長、理学療法学科長、  
国際医療福祉大学成田病院・リハビリテーション技術部長  
西田 裕介

### 「看護教育における臨床実習と教育方法」

演者:福岡国際医療福祉大学・看護学部長 大池 美也子

### 「近未来の医学部教育」

演者:医学部医学教育統括センター副センター長、  
感染症学教授 矢野 晴美  
座長:大学院医学研究科・循環器内科学教授、  
福岡薬学部・薬学科教授、医学部・臨床実習ディレクター  
岸 拓弥

### ■優秀演題表彰者

#### ■学会長賞

国際医療福祉大学病院 消化器・乳腺外科 鈴木 範彦

#### ■学術大会長賞

福岡薬学部 薬学科 塚本 宏樹

#### ■優秀賞(口演)

国際医療福祉大学病院 消化器内科 須藤 大輔  
福岡国際医療福祉大学 看護学部 看護学科 生駒 千恵  
福岡薬学部 薬学科 梶岡 俊一  
福岡保健医療学部 医学検査学科 小荒田 秀一  
薬学部 薬学科 角南 明彦  
福岡保健医療学部 医学検査学科 澁田 樹

#### ■優秀賞(ポスター)

大学院医療福祉学研究所保健医療学専攻看護学分野 坂木 晴世  
保健医療学部 看護学科 松永 洋子  
保健医療学部 理学療法学科 糸数 昌史  
保健医療学部 理学療法学科 原 毅  
保健医療学部 理学療法学科 渡邊 観世子  
福岡保健医療学部 理学療法学科 瀧地 望  
福岡保健医療学部 作業療法学科 長谷 麻由  
保健医療学部 言語聴覚学科 前新 直志  
福岡国際医療福祉大学 医療学部 視能訓練学科 橋本 勇希  
福岡保健医療学部 医学検査学科 文室 知之  
総合教育センター 山口 真葵  
国際医療福祉大学成田病院 腎泌尿器外科 宮崎 淳  
医学部 病理・病理診断学 潮見 隆之  
医学部 麻酔・集中治療医学 花崎 元彦  
国際医療福祉大学三田病院 放射線科 田島 拓  
福岡中央病院 脳神経センター脳神経内科 中村 優理

## 感染症対策のなか各キャンパスで開催！ 大学祭特集

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ここ数年各キャンパスとも開催を見送ってきた大学祭。今年は行動制限が緩和されたことを受け、感染症対策に万全を期したうえで、各キャンパスで開催した。数年ぶりの開催となった大学祭の様子を写真とともにレポートする。

●新型コロナウイルス感染症の収束を願って夜空に舞った大川キャンパスのスカイランタン



●東京赤坂キャンパス学部生による弾き語り演奏

●熱気球の係留も見られた大田原キャンパス「風花祭」

### 初の運動会との合同開催となった「第27回風花祭」

10月8日(土)・9日(日)に大田原キャンパスで「第27回風花祭」を開催した。4年ぶりの対面開催となっただけでなく、運動会との合同開催という初めての取り組みとなった。実行委員は風花祭も運動会も経験していない学生がほとんどだったこともあり、感染対策をふまえた催し物の検討をはじめ、準備や運営については手探りの状態だったが、全員一丸となってアイデアを出し合い、無事当日を迎えることができた。

運動会は、グラウンドでリレー・借り人競争、体育館でドッジボール・バレーボールを実施した。風花祭は、ステージでのライブや学内展示、コンテスト、ビンゴ大会、スタンプラリーなどを実施した。当日は天気心配されたが、2日間とも穏やかな気候となり、運動会には200人、風花祭には1600人が参加した。最終日には華やかな熱気球の係留や豪華な打ち上げ花火が風花祭に花を添えた。(学生課 齊藤智美)



●新たに競技に追加されたバレーボール大会

●お題の「人」を探してゴールする借り人競争

●I.D.Cダンス部によるダンス披露

●サークル「PCCラボ」の石饅作り体験

### 4年ぶりの開催で約2000人が来場

成田キャンパスでは、10月8日(土)・9日(日)の日程で「第7回成翔祭」が開かれた。2019年の台風、そして2年続きのコロナ禍を経て、開催は実に4年ぶり。今年のテーマは「Leap over(飛び越える)」。試練を乗り越え高みをめざす想いを込めた。

対面での実施にあたり、学外への開放には予約定員制がとられた。たこ焼きなどの模擬店でも、場所を区切り「黙食」を促

すなど、感染予防策が厳重に施された。学生サークルや学科の展示、実演のほか、成田国際空港の地元らしく初日には日本航空のシングジャズクラブ「シルバーウイングス」が演奏を披露。ビンゴ大会など趣向を凝らしたイベントの数々で、キャンパスには大学祭ならではの活気があふれた。(広報 城真弘)



●成翔祭：大階段の装飾

●ステージ企画：軽音部

●NS・PT合同企画：医療教育体験

●屋外では模擬店も実施

### 大田原キャンパス

### 第5回茜陵祭「離れていても心はともに」

東京赤坂キャンパスでは10月8日(土)、新型コロナウイルスの影響で開催が危ぶまれるなか、第5回茜陵祭を対面で実施した。キャンパス設立当初から昨年度まで台風の影響や新型コロナウイルスの影響で中止や小規模開催などが続き、4学年の学生が揃う中で対面かつ開催規模に制限がない状態での実施は今年度がほぼ初めてとなった。

今年度の第5回茜陵祭は「ミニオープンキャンパス」「橋本和明心理学長による市民公開講座(茜陵祭特別記念講演)」「教育後援会の集い」と同時開催で、多くの方にご来場いただ

いた。今年度は、飲食を伴う催事を禁止したことから「アカデミック」な部分と「体験」をテーマに「アロマワックスバー作り・ワークショップ」「スタンプラリー」「警視庁赤坂警察署による各種体験」など幅広い世代が楽しめる企画を盛り込んだ。ご協力いただいた地域の皆様・教職員の皆様、ご関係者の皆様には改めて感謝を申し上げるとともに今年度の反省点を次年度に生かし、よりパワーアップしたイベントを次年度は期待したい。(事務課 野原大彰)



●教授と大学院生によるライブ演奏

●大学院生によるアロマワックスバーワークショップ

●アロマワックスバー作品

●赤坂同好会(サークル)の地域展示

### 第17回 潮風祭「RE:START」

10月8日(土)、小田原キャンパスにて4年ぶりとなる第17回潮風祭が開催された。

当日の学生によるイベントでは、6階講堂のステージで、軽音楽部の演奏から始まり、歌うまコンテスト、クイズを行い、ステージ外では、縁日や学科体験を行った。感染対策を講じながら、出演者の協力もあり、参加者たちは、大変盛り上がった。

また、今年から新たに就任した小森哲夫学部長の特別講演会、その後に会員のつどいや学科別懇談会を行い、保護者と教員の充実した交流もはかることができた。

大学祭運営を経験した学生がいなかったなか、今年のテーマの「RE:START」さながら、新たに作り上げた潮風祭だったが、実行委員長をはじめ、全員の力で学園祭を盛り上げることができた。(学務課 大木颯人)



●軽音楽部コンサート

●革細工ストラップ作り(作業療法学科)

●縁日コーナーのストラックアウト体験

●17期 潮風祭実行委員

### 成田キャンパス

### 1年生の実行委員が中心となって作り上げた第18回月華祭

10月8日(土)、第18回月華祭が開催された。新型コロナウイルス感染症の拡大から3年間開催がなかったため、今回の大学祭は自分たちが一から築き上げるようになった。入学間もない1年生中心の実行委員だったが、事務職員や各学科の教員の方々のサポートもあり、実現したかった企画・運営を実施できた。特にステージ企画では、軽音楽部やダンス部、DJライブをはじめとした有志ライブパフォーマンスのほか、現在SNSで人気沸騰中の「博多4K」・「シングアンサー」のスペ

シャルライブを開催。パワー溢れるステージに会場は大盛り上がりだった。

また、夜には新型コロナウイルスの収束を祈願し、約100機のスカイランタンを大川キャンパス上空に打ち上げた。その幻想的な風景は観客の皆様にも感動を与え、大好評だった。規模縮小により制限は多かったものの、3年ぶりに大川キャンパスが1つになれた、素晴らしい大学祭になった。(大川キャンパス学友会長 瓜生耕大(福岡薬学部3年))



●大学祭に向け練習を頑張った軽音楽部

●学部生との交流の場となった留学生別科ブース

●模擬店も大好評!

●実行委員長(1年生)挨拶

# 2022年度IUHW奨学金授与式

## 東京赤坂キャンパスで開催

アジア各国からのフルスカラーシップの奨学生に奨学金を授与するIUHW奨学金授与式が10月7日(金)、東京赤坂キャンパスで3年ぶりに行われた。新型コロナウイルスの感染拡大により2019年の授与式以来開催できなかったため、2020年度~2022年度にIUHW奨学生として入学した48人の学部生(医学部奨学生44人、学部奨学生4人)および4人の大学院生の合計52人が今回の授与の対象となり、証明書が手渡された。



### 新型コロナ感染拡大後3年ぶりの開催となったIUHW奨学金授与式

授与式冒頭、高木邦格理事長は「IUHW奨学金制度は2001年、アジア各国の医療福祉分野で指導的立場となる人材の育成に寄与するために設立しました。その後、2017年には医学部留学生特別奨学生制度を設立し、2018年にモンゴル教育省と、2019年にベトナム保健省と、医師以外の医療福祉専門職養成を目的に留学生をフルスカラーシップで受け入れる制度も設立しました。これらの制度を合わせ、本学はこれまでに数10億円の奨学金を留学生に供与しています。これらの奨学金制度の目的は、留学生の皆さんが将来母国に戻り、母国の中枢スタッフとして医療福祉水準を上げるために活躍していただくことです。今後も健康に十分気をつけて、充実した留学生生活を送ってください」と激励した。

鈴木康裕学長は「私自身、留学経験があるのでよくわかりますが、外国での学生生活は苦勞の連続です。しかし、目の前に懸念に取り組むうちに、苦勞を忘れるほどの喜びや深い学びを得られるのではないのでしょうか。何か困ったことがあれば本学の教職員が全力でサポートしますので、ぜひ一杯頑張ってください。卒業後、皆さまが本学で得た知識や経験を生かして、母国の医療福祉サービス分野のリーダーとして活躍する未来を楽しみにしております」と述べた。

授与式には、各国駐日大使館の代表やアジア婦人友好会の役員も多数出席した。駐日モンゴル国ダンバダルジャー・パッチャルガル特命全権大使は「IUHW奨学金制度は、モンゴルの医学教育をより実りあるものにするために大きく貢献しています。留学生の皆さんは帰国後、モンゴルの医学分野を牽引する存在として活躍されることを期待しています。国際医療福祉大学とモンゴル国とのさらなる友好と発展、学生の皆さんのご成功をお祈りいたします」と述べた。

アジア婦人友好会からは、高村治子会長をはじめ、中曾根真

理子副会長、浦上聖子副会長、藤本厚子専務理事および上田知枝美常務理事が参加した。高村会長は、「アジア婦人友好会は、高木理事長がIUHW奨学金制度を設立した2001年から、ベトナム、ネパール、モンゴル、ミャンマー、韓国、カンボジア、ラオス、タイ、サモアからの奨学生を推薦してまいりました。奨学生は帰国後、日本で体得された知識と経験を生かしそれぞれに活躍しています。今後も、世界に貢献する奨学生たちのご支援を賜りますよう、サポートさせていただきます」と祝辞を述べた。



●授与式参加者全員で記念撮影

### IUHW奨学生としての決意を語った代表の5人

続いて、奨学生代表の5人(医学部3年生 チュオン・コン・フィさん(ベトナム)、医学部2年生 ポウン・ソワンラタナさん(カンボジア)、医学部1年生 スス・ソウ・サンさん(ミャンマー)、医学部1年生 ナランバヤル・アマルサナーさん(モンゴル)、大学院生 リ・ブンジョウさん(中国))が流暢な日本語で挨拶した。5人のうち最初に挨拶した医学部3年生のチュオン・コン・フィさん(写真:表紙)は「奨学生として選ばれた名誉を改めて感じ、身の引き締まる思いです。私は日本の先端医療を学ぶためにIUHWに入学しました。IUHWは将来国際的に活躍できる医師となるための質の高いカリキュラムが整えられており、教職員の皆様もサポートしてくださるので、安心して目標に向かって努力を続けられます。私は卒業後、ベトナムと日本の医療に貢献できる医師になりたいと考えています。夢を実現できるようこれからも一生懸命勉学に励みます」と決意を語った。



●高木理事長、鈴木学長、レ・チャン・グアン先生、駐日ベトナム大使館ヴァー・ティ・リエン・フォン二等書記官とベトナムの奨学生たち



●授与式の緊張から解放され笑顔がはじける奨学生たち



●鈴木学長より奨学金授与と証明書を手渡される奨学生



●駐日モンゴル国ダンバダルジャー・パッチャルガル特命全権大使



●アジア婦人友好会高村治子会長

# モンゴル国立医科大学 創立80周年記念共同医療シンポジウム

## ウランバートルにて開催

国際医療福祉大学と学術協定を結ぶモンゴル国立医科大学の創立80周年を記念し、本学と同大の共同医療シンポジウムが9月28日(水)、ウランバートル市内のホテルで開催された。本学からは、高木邦格理事長、鈴木康裕学長、成田病院副院長・医学部副学部長の潮見隆之主任教授、成田病院副院長・医学部放射線医学の桐生茂主任教授、医学教育統括センター長の赤津晴子教授、東京赤坂キャンパス医療マネジメント学科の篠浦丞教授がウランバートルを訪問し参加した。



### 「臨床医学と大学病院経営」をテーマに討論 現地国営テレビからの取材も

今回の共同医療シンポジウムは300名以上の医療関係者が参加し、「臨床医学と大学病院経営」をテーマに、さまざまな立場から活発な討議が行われた。本学からは、鈴木学長がWHOやこれまでの経験をふまえ「日本の新型コロナウイルス感染症パンデミックの経験と課題」、篠浦教授が日本の病院経営の現状を織り込みながら「臨床現場から見た日米の医療フレームワークの比較」について、それぞれ英語で基調講演を行った。この様子は、現地の国営テレビにも取り上げられ、鈴木学長をはじめ本学の関係者がインタビューを受けた。なお、鈴木学長の講演はモンゴル保健省の関係者から高い関心が寄せられ、保健省の職員向けに改めて講演して欲しいとの依頼があった。

2022年は日本モンゴル外交関係樹立50周年の記念の年でもあり、この共同医療シンポジウムは日本大使館の「記念事業」として認定された。



●講演する鈴木学長



●演者に質問する篠浦教授



●モンゴル国営テレビからインタビューを受ける高木理事長

### モンゴル国立医科大学 高木理事長に名誉教授の称号を授与

現在、本学医学部には14人のモンゴル人留学生が学んでいるが、いよいよ2023年3月には2人の一期生が卒業し、臨床研修2年を経てモンゴルに帰国することになる。彼らの臨床研修終了後の進路を協議するため、高木理事長は鈴木学長とともに、ロブサンツェレン・エンフアムガラン教育大臣、セレージャブ・エンフボルド保健大臣とそれぞれ面談を行い、モンゴル国立医科大学の附属病院である日本モンゴル教育病院を中心とした卒業生の受け入れ態勢の構築に加えて、潮見主任教授と桐生主任教授の2人を中心として行うモンゴルに

おける基本的な診断能力・技術を全面的に向上させるための遠隔病理画像診断システムの導入などについて活発な意見交換を行った。

本学は日本モンゴル教育病院と同院内に遠隔病理や遠隔画像診断を実施するためのIUHW遠隔研修センター(仮称)を設置することが記載された協定書を締結しており、モンゴルの医療福祉分野の向上に向けた、今後の医療協力体制の構築が期待される。今回の出張においては、日本モンゴル教育病院を視察し、メンデジャルガル・アディルサイハン病院長と遠隔研修センターの具体的な設置場所や運用スキームにつき協議を行った。

こうした開学以来の本学の医療福祉分野における人材育成の活動がモンゴル政府からも認められ、2020年12月に高木理事長は本学理事長としてモンゴル大統領から外国人に授与される勲章で最高位の「北極星勲章」を受章しているが、このたび、モンゴル国立医科大学からも名誉教授の称号を授与された。



●モンゴル国立医科大学のニヤムダヴァー・フルバートル学長から名誉教授の称号を授与される高木理事長



●モンゴル国立医科大学ニヤムダヴァー・フルバートル学長、ダムディンドルジ・ボルドバートル副学長と本学教授陣



●ロブサンツェレン・エンフアムガラン教育大臣を訪問する高木理事長と鈴木学長



●日本モンゴル教育病院視察



●セレージャブ・エンフボルド保健大臣を訪問する高木理事長と鈴木学長

### 第65回 東日本医学部生総合体育大会で水泳部、ボート部躍動

吉野さん50メートル背泳ぎ2位／男子ダブルスカルAで山下雄大、アバサザテ・ダニエル組優勝



●東医体50メートル背泳ぎで2位入賞の吉野藍さん



●ボートの部で入賞したメンバーたち

東日本38大学で作る医学生スポーツ祭典「第65回東日本医学部生総合体育大会（東医体）」夏季大会が8月、コロナ禍による中断を乗り越え3年ぶりに開催された。本学では水泳部、ボート部が好成績を収めた。

このうち4月に部昇格を果たした水泳部では、吉野藍さんが女子50メートル背泳ぎで2位に入賞。吉野さんは「まさか入賞できると思っていなかったのでも嬉しい。コロナ禍で試行錯誤をしながら練習を重ねた成果をしっかりと出し切れた

と感じるタイムだった」と喜びを語る。また、今後は医療系学生と参加できる大会への参加や個人種目、リレー競技でも結果を残したいという。

成田水泳部は医学科だけでなく、看護、理学療法、医学検査の各学科からなる部員25人。週に1回大学の体育館で筋トレをし、週に1、2回、習志野市の千葉総合国際水泳場に通って練習を積んでいる。

一方、ボート部では男子ダブルスカルで山下雄大、アバサザテ・ダニエル組が優勝。他4種目でも6位入賞を果たした。併催された医療系大会においても好成績を残している。収束の目に見えないコロナ禍でも大会の開催を信じ、ウェイトトレーニングや乗艇練習を大切に力を付けた成果だ。

次期主将の小田哲史さんは「一人ひとりの高い意識と選手やマネージャーなどの部員の団結が実を結んだ。目標を高く掲げ達成するための方法を部員みんなで本気で考える、そんな部活環境を作りたい」と抱負を語っている。

ボート部はサークルメンバーも入れると40人の大所帯。香取市にある、小見川高校艇庫に向かい、ウェイトトレーニングや乗艇練習を行っている。

### 学生ボランティアサークル、食品や文具を地元へ寄贈

成田キャンパスの学生ボランティアサークル「IUHWパントリー」は7月、地元貢献のため学内から募った寄付の成果を社会福祉法人成田市社会福祉協議会に寄贈した。家庭で余った食品を必要な人に寄付するフードドライブの取り組みで、サークルが企画し、ポスターやメール、SNSなどで告知を行い、6日間で寄付金12,961円、食品450点（うち349点は寄付金で購入）、文具等94点が寄せられた。いずれも成田市社会福祉協議会が開催する「第3回フードパントリーなりた」（7月30日）でひとり親家庭とコロナの影響による減収世帯に配られた。

サークルのメンバーは「多くの寄付が集まった。学内からの協力で感謝したい」と話している。

1回目のフードドライブは学生有志としての活動だった。2回目となる今回はサークルとして体制を新たにして取り組んだ。寄付された食品を福祉団体などに寄付する活動がフードドライブだが、困

っている方々に食品を無償で直接配布する「フードパントリー」という言葉を広く伝えたいと考えサークル名を決めたという。

サークルでは、今後も集めた寄付に責任を持ち必要とする人の元に届ける活動を続けるとともに、コロナの状況に左右されずに食品が集まるようにアピールの方法などをさらに工夫したいという。



●ボランティアサークル「IUHWパントリー」のメンバー



●学内で集まった寄付用の食品や文具

### 令和4年度成田市消防団女性部 辞令交付式を実施

令和4年度成田市女性消防団辞令交付式が10月3日、成田キャンパスで行われ、医学科1年生女子の川東希さん、野口荒野さん、紀川サミーノまりあさんが新たに入団した。昨年度までに入団した団員と合わせて本学からは計20人が所属することとなった。

毎年度、成田キャンパス医学部の学生が成田市消防団に入団するにあたり、成田市消防本部ならびに成田市消防団による辞令交付式が成田キャンパスで行われている。

本活動は本学の地域への貢献の一環であり大学と地域の交流をPRしている。成田キャンパスでは成田市と協力して一次救命処置の普及を推進しており、救命講習会を受講・修了

した学生が地域の消防団員となることは、普及活動の前進となる。成田市消防団部長より辞令を受け取った新団員は真新しい消防団の活動服に身を包み、意気込んだ様子であった。

今後、地域の防災イベントや研修会などに参加して、応急手当指導や火災予防活動などを実践していく。



●辞令交付式の様子

### 那須シミュレーション医学センターで 医学部生「縫合コンテスト」開催

国際医療福祉大学病院内にいる那須シミュレーション医学センターでは10月5日、医学部生「縫合コンテスト」が開催され、30人の医学部生が参加して修練の成果を競い合った。

4月にオープンした那須シミュレーション医学センターでは、手術の際に身体の一部や医療機器を縛って固定する縫合の手技を人工皮膚を用いるなどして学べるため、疑似体験を通して経験を積み上げることができる。

今回のコンテストは学生を11のグループに分けて実施。学生たちは豚の皮を使って皮膚全層縫合と真皮埋没縫合の2種類の縫合に挑戦した。その出来栄を同病院の医師11人が審査員となり確認し、採点基準に従って採点したうえで優劣を決めた。

その結果、上位3人に記念の盾と賞状が授与され、優勝したチョ・ハヨンさんには病院長賞が授与された。参加した学生は皆、真剣な表情で縫合に取り組み、コンテスト終了後は審査員の医師からのアドバイスに耳を傾けながら練習する学生も。鈴木病院長は「今は、シミュレーションで十分なトレーニングを積むことができる時代となった。センターを大いに活用し学んでいただきたい」と、学生たちにエールを送った。

那須シミュレーション医学センターは、医療従事者を志す

学生の教育実践の場として活用はもろろん、大学（実習教育）と病院（臨床）と地域をつなぐ医療従事者のスキルアップへの取り組みを支援するために開設された。多種多様な高精度シミュレータを設置しており、国際医療福祉大学医学部生や看護学生をはじめ、病院内の研修医、各科専門医、看護師、薬剤師、理学療法士等のリハビリテーションスタッフなどの医療関連職が、模擬的な環境のなかで、安全で質の高い医療を行うためのトレーニングを進めることが可能だ。



●縫合技術を競い合う医学部生たち

### 令和4年度大田原キャンパス関連職種連携実習報告会を開催



●関連職種連携実習報告会の様子

令和4年度の「関連職種連携実習報告会」が8月27日、大田原キャンパスで開かれた。学科横断のチームを編成しチーム医療を学ぶ「関連職種連携教育」の最終ステップとなる報告会は、今年度も感染対策を講じながら、昨年よりも施設を増やし、9施設・13チームの実習を実施することができた。医学部を加えての実習は3年目になるが、今年度は新たに東京赤坂キャンパスの学生ともチームを組んだ。特に心理学科の学生が加わるのは初めてであり、新たな視点でのチーム医療・チームケアによる学びを得ることができた。

報告会では、各施設の実習指導者に来校いただき、また、在校生・成田・東京赤坂キャンパス教員にはオンラインシステムで接続をし、実習の成果を報告した。医療現場の実情に沿った質問や感想を受け、さらに理解を深めることができた。

### 大学祭企画と兼ねた記念講演会

東京赤坂キャンパスの大学祭、茜陵祭の企画と兼ねた記念講演となる市民公開講座が10月8日、東京赤坂キャンパス講堂で行われた。「愛着と課題のある子どもたち-その苦悩と生きにくさを考える」をテーマに、心理学科長・臨床心理学専攻主任の橋本和明教授が登壇した。

愛着や発達の障害は身体障害と違って外からはわかりにくい障害だが、それを有する人は人間関係や社会生活での苦悩が大きく、生きにくさを感じている。この問題について

どのように子どもたちにアプローチしていけばよいのかを、体験・特徴、心理的メカニズムの観点から具体例を交えつつ分かりやすく説明した。

参加者から募ったアンケートでは、「温かい人柄や熱意・愛情が伝わるような講演だった」「あつという間の1時間だった」「子育てを終えたが、学び直して子供たちの支援をしていきたいと思った」など好評をいただき、参加者数は東京赤坂キャンパス市民公開講座としては過去最多の133人となった。



●橋本和明心理学科長の講演

## 成田キャンパス

## 英語でのプレゼン世界に発信、TEDx IUHWNarita2022

英語によるプレゼンテーションを世界に発信するTEDx IUHWNarita2022の動画収録が、10月2日、成田キャンパスで行われ、医学部学生3名と教員1名が英語によるプレゼンテーションを行った。

TEDは米ニューヨークに本部があり、著名人の講演などを動画で無料配信している非営利団体。TEDxはこのTEDからライセンスを受け、コミュニティがそれぞれプレゼンテーションを行っている。IUHWNaritaは2019年から参加している。

今年のテーマは七色の分光を意味する「PRISM」(プリズム)。イベントを通して光が拡散するようにスピーカーの考えや意見が聴衆に届くように思いを込めた。今年は対面方式での開催を模索したが、新型コロナウイルスの状況などをふまえて直前の9月に対面・オンラインを合わせた開催に



●TEDx IUHWNarita 運営メンバーの皆さん



●プレゼンテーションを行うスピーカー

変更。公開の11月に向けて準備を進めている。

初日には初の試みとして本学学生、教職員に向けた対面による上映会と、YouTubeによる配信(オンライン)を行う。また、観客参加型のワークショップを同時開催し、スピーカーからの問いかけに観客が答え、ディスカッションできる場が設けられる。

聴衆にスピーカーの声を生で届けることで、より大きな感動を与え記憶に残るように、来年の2023年こそは、完全対面のイベント開催を行いたいと考えている。(広報 城貴弘)

## 大田原キャンパス

## 骨髄バンクドナー登録に貢献で栃木県知事から感謝状

大田原キャンパスの学生による骨髄バンクドナー登録への貢献に対し、栃木県知事から本学に感謝状が贈られた。表彰式は7月25日、宇都宮市の県公館で開催され、本学代表として新井田孝裕副学長が出席し、北村一郎副知事(福田富一知事の代理)から感謝状と記念品が贈呈された。

大田原キャンパスでは栃木県赤十字血液センターの献血活動に場所を提供し、キャンパス内で献血が年10回程度、実施されている。学生サークルが献血業務を手伝うほか、骨髄バンク登録にも協力。その結果、2004年度から継続・安定して本学から骨髄バンク登録があり、県業務課によると、2021年度までの登録者数は1128人に上り、昨年度は23人で県全体の約1割を占めた。登録者数が継続・安定している



●北村副知事から感謝状を受け取る新井田副学長

施設は非常に少ないというのが表彰理由だ。

北村副知事は、表彰式の挨拶で、「改めて敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます」と福田知事の挨拶を代読した。一方、新井田副学長は今回の表彰について「このような栄誉ある賞をいただき大変光栄です。今後も保健・医療・福祉の総合大学として、建学の精神である“共に生きる社会の実現”に向けて本学の使命を全うしていきたい」と話している。

(総務・広報担当 村雲克典)



●記念撮影

## 大川キャンパス

## 相次ぐ、教授陣の研究成果の論文発表・掲載

大川キャンパスでは、この夏から秋にかけて、福岡薬学部教授の共同研究の成果が、相次いで論文として掲載された。

一つは、同学部で臨床神経学中枢神経機能学を担当する緒方勝也教授(専門分野/臨床神経生理学)が、九州大学大学院人間環境学研究院の光藤宏行准教授や福岡国際医療福祉大学の飛松省三教授らと行った研究で、映像に合わせて左右の眼を揃える脳のしくみを解明したもの。英国のオンライン学術雑誌「Scientific Reports」(7月8日付)に掲載された。この研究により幅広い脳内ネットワークの関わりが明らかになったことで、両眼のずれに悩む人々の治療法開発が期待される。

もう一つは、内科学、老年学を担当する岸拓弥教授(専門分野/循環器内科学)が、日本での研究責任者を務めた、左室収縮力が低下した慢性心不全に対する薬物療法のGDMT(ガイドラインを遵守した治療)の治療実態に関する日本・米

国・スウェーデンによる共同研究だ。このデータベース臨床研究により16%の年死亡率かつ罹患者の急増で社会的問題となっている慢性心不全のGDMTの実態が国によって異なることなどが明らかになり、米国心臓病学会の学会誌JACC: Heart Failureに掲載された。

こうした教授陣の研究への取り組みや成果が学生を刺激し、福岡薬学部がめざす「リサーチマインドを持った薬剤師の育成」につながることを期待したい。

(入試学生募集課 帆足リエ)



●緒方勝也教授

●岸拓弥教授

## 東京赤坂キャンパス

## 病院実習報告会開催

医療マネジメント学科3年生による「病院実習報告会」が10月18日、東京赤坂キャンパス講堂で実施された。病院実習は8月15日~9月10日の期間で

実施された。新型コロナウイルスの影響で各病院から実習の受け入れが延期や中止を求められ調整は難しいところもあったが開催にこぎつけることができ、関係者はほっとしている。また、協力いただいた病院関係者にも改めて謝意を表したい。

病院実習では、医事課以外にもさまざまな部署や課を訪問し、病院の仕組みや運営、医療従事者の皆さんが日頃行っている窓口業務も経験した。病院実習報告会ではそうした実習先で学んだこと、体験したことをそれぞれグループごとに発表した。

3年生は自分たちの言葉で発表するのは今回の実習報告会が初めての経験だったため、緊張した様子だったが、充実した達成感を得られたようだ。報告会には2年生も参加し、先輩たちの発表をメモを取りながら聞いていた。今回の実習と実習報告会を通して「患者様に寄り添うこと」「多職種間での連携の大切さ」がどれだけ必要なことか身をもって経験できたのではないだろうか。

(事務課 野原大彰)



●病院実習報告会の様子

## 小田原キャンパス

## 小田原キャンパスで関連病院説明会開催

小田原キャンパスでは毎年8月に、本学関連病院に就職をした先輩をお招きし、関連病院説明会を実施している。今年度については新型コロナウイルス感染症拡大防止を考慮し、看護学科はオンライン、理学療法学科・作業療法学科は対面とオンラインを複合したハイブリッド形式で実施した。

8月3日に看護学科3年生を対象に、関連病院説明会をオンラインで実施した。本学から就職をした先輩看護師より直に、自身の体験などを聞くことで、学生は将来のイメージを具体的に描くことができた。

8月22日には理学療法学科・作業療法学科合同で、4年生を対象に実施した。初めに、各病院から学生全体へのプレゼンテーションを行い、その後、病院ごとに教室を分け、個別の説明を行った。個別説明では学生たちが参加施設のなかから希望する病院を2つ選び、より詳しい説明を聞いた。

学生たちは、各関連病院の説明を聞くことで、関連病院へ興味を抱き、多くの学生が、実際に就職活動に動き出した。



●8月22日に行われた理学療法学科・作業療法学科を対象とした関連病院説明会

看護学科については、12月19日に2回目の関連病院説明会を実施予定。さらに就職に対して理解を深め、就職活動に生かしてもらいたい。

(学務課学生係 大木颯人)

## 国際医療福祉大学成田病院

### リトアニア健康科学大学から10人の医学部生を1か月実習で受け入れ

9月5日～30日、本学の提携校であるリトアニア健康科学大学から10人の医学部生が来日、当院で4週間の実習を受け入れた。リトアニア健康科学大学はバルト3国の1つであるリトアニア共和国の第2の都市カウナスにある国立大学で、本学とは2019年に学術交流協定を締結している。

水際対策緩和により来日したリトアニアの医学部生たちは内科と外科の各診療科で2週間ずつ、外来での診療や病棟回診、手術の見学などさまざまな実習を行った。リトアニアはロシアやウクライナにも近く、母国は緊張感に包まれていると思われるなか学生たちはとても明るく元気で、当院の広大な敷地や設備に驚きながら意欲的に実習に取り組んでいた。

9月28日には修了式を開催、宮崎勝病院長から修了証が授与され4週間に及ぶ実習が終了した。

修了式での学生たちのスピーチをご紹介します。

「すばらしい病院でとてもたくさん刺激を受け、1か月はあっという間でした。日本は初めてで不安だったけれど、先生方と学生たちがとても親切で日本が大好きになりました。リトアニア健康科学大学とIUHWはこの先もつながりを深めていけると感じています。来年IUHWの学生が私たちの大学に研修に来た時には、皆さんが私たちにしてくださったと同じようにお迎えしたいし、私たちが日本に来てよかったと感じたように、彼らにもリトアニアに来てよかったと思って帰ってもらえるようにしたいです。ドクターになったらまたいつかこの病院に来て、皆さんとお会いできることを楽しみにしています。1か月間どうもありがとうございました」  
(広報室)



●前列左から、潮見副院長・宮崎病院長・中世古副院長・松野副院長



●救急科での実習中に千葉日報社の取材を受ける

## 国際医療福祉大学病院

### ハイブリッド手術室の運用を開始しました

三田病院、成田病院に続いてグループ病院で3例目、また栃木県北部地域初のハイブリッド手術室が当院に開設され、10月4日、血管外科部長の墨誠医師による腹部大動脈瘤ステントグラフト内挿術が実施された。

ハイブリッド手術室は、手術台と心・脳血管X線撮影装置を組み合わせ、カテーテルによる血管内治療と高精度外科的治療を同時に行える、まさに「ハイブリッド」な治療室である。

常設のX線撮影装置により、検査結果がリアルタイムに確認できる。さらに、可動性の高い手術台と多角的な情報を集約する大型モニターなどの最新の周辺支援システムが治療の確実性を高め、高度で緻密な血管内治療や新しい外科的手術の可能性も広がる。

今後は、ハイブリッド手術室の導入により多くの専門診療科を持つ総合病院として、さらなる地域医療の発展と皆様の健康に貢献していききたい。

(総務課 中澤彩乃)



●ハイブリッド手術室内の手術の様子

## 国際医療福祉大学三田病院

### 救急への取り組みが評価され、東京消防庁から感謝状が授与されました

救急の日となる9月9日付で、東京消防庁から当院副院長で救急運営委員会の委員長でもある篠田昌宏教授（消化器センター長）に感謝状が授与された。

東京都指定二次救急医療機関である当院では、職員一丸となって積極的に救急医療に取り組んでおり、2021年度の救急車受け入れ件数は前年比1.6倍と劇的に増加した。今年度も前年度の同時点と比較すると、約20%を上回る受け入れを行っている。こうした努力が評価され、「救急業務の充実・発展に多大な貢献をした」と表彰された。

表彰を受けて、篠田副院長は「すばらしい感謝状をいただき光栄です。まわりの方にお支えいただき、みんなでいただいた感謝状だと思います。これまでは救急業務の拡大を中心に行ってきましたが、現在は円滑な業務推進と充実した体制の拡充をはかる時期に来ています。今後に向けて、ますますがんばります」と意欲を語った。

(総務企画課 青島千恵)



●賞状を手にする篠田昌宏副院長

## 国際医療福祉大学熱海病院

### 20周年記念健康講座を熱海市指定有形文化財である起雲閣にて開催

当院が国立熱海病院を継承して今年で20年となることを記念し、10月15日、熱海を代表する起雲閣にて記念健康講座を開催した。熱海健康福祉センターの伊藤正仁所長より「熱海病院と熱海保健所の連携」について、続いて池田佳史病院長と石井淳一郎副院長が講演を行い、市内外から訪れた参加者が耳を傾けた。

池田病院長は、「がん治療」をテーマとするシリーズの1つ「大腸がん」について、予防と早期発見の大切さ、積極的な検診受診を呼びかけた。次に、再演の要望が多い石井副院長が「頻尿の悩みをズバツと解決」と題し、カフェインの摂取量や足のむくみに気をつけ、頻尿に悩んだ際の泌尿器科受診のすすめを述べた。最後は、佐藤哲夫名誉病院長が「病気について正しい知識を得ることで不安がなくなる。検査を受けるとともに、身体の具合がわるいときには当院を受診していただきたい」と締め括った。

今後も、熱海・伊東圏域の中核病院として、地域の皆様に安心・安全な医療を提供していきたい。

(総務課 木村玲於奈)



●大腸がんについて説明する池田佳史病院長

## 国際医療福祉大学市川病院

### 「神経難病患者様へのコミュニケーション支援」研修会を開催

7月16日、神経難病支援に従事している医療・介護者を対象とした研修会を開催、31人が参加した。「神経難病患者様へのコミュニケーション支援」をテーマとし、当院の理学療法士である浅川孝司主任から神経難病センター・リハビリテーション室の取り組みを紹介した。吉野内科・神経内科医院の言語聴覚士である山本直史先生を外部講師として招き、AAC（拡大代替コミュニケーション）支援の概要や訪問リハビリテーションでの実践について報告いただいたほか、当院の作業療法士である大寺亜由美主任が病院での実践報告を行った。本件は、厚生労働省障害者総合支援事業費の補助を得ており、研修会の後半では補助金で購入した各種支援機器の操作を体験していただいた。

今後も、地域の支援者が抱えている困難事をテーマとして取り上げ、神経難病支援の中核施設としての取り組みを続けていきたい。

(総務課 細田幸生)



●研修会での発表を聞く参加者たち

## 国際医療福祉大学塩谷病院

### 吉澤二郎師長が「栃木県救急医療功労者知事表彰」を受賞

9月13日、「第62回栃木県公衆衛生大会・第60回栃木県公衆衛生学会及び令和4年度救急医療週間記念大会」が栃木県庁昭和館正庁で開催され、当院看護師の吉澤二郎師長が「栃木県救急医療功労者知事表彰」を受賞した。

これは、救急医療体制の整備に貢献する等救急医療に関する功績が顕著な個人および団体を表彰するもので、栃木県における救急医療体制の充実を促進することを目的としている。

今回は個人として3人が表彰されたが、栃木県県北地域では唯一の受賞となった。

吉澤師長は、「このような賞をいただき、大変光栄です。病院職員のがんばりがチーム医療となり、今回の結果につながったのだと思います。今後も、救急医療の充実、またスタッフへの指導を積極的に行い、救急医療や災害時支援などに取り組んでいきたい」と抱負を語った。

(総務・人事課 後藤文栄)



●賞状を手にする吉澤二郎師長

## 医療法人財団 順和会

### 新型コロナワクチン 港区集団接種会場を運営

10月18日～12月28日（土曜午後・日・祝除く）の期間、当グループは国際医療福祉大学東京赤坂キャンパスW棟10階にて新型コロナワクチン港区集団接種会場を運営している。昨年の1・2回目接種以来、当グループは接種会場運営に協力しており、引き続き港区の要請を受ける形で実施することとなった。

本会場は、山王病院や赤坂山王メディカルセンターを擁する順和会の職員と大学職員が協同で運営しており、1日に520人、延べ2万8千人以上の接種枠を準備している。今回は、オミクロン株対応のワクチンで3回目以降の方が対象であり、多くの対象者が見込まれている。

今後も医療機関が運営する集団接種会場として皆様に安心して利用いただけるよう、接種促進・地域医療に貢献していきたい。

(山王病院 総務課 山本悦子)



●接種会場の様子

# 第14回国際医療福祉大学・高邦会 臨床研修指導医養成ワークショップ

## 国際医療福祉大学成田病院で開催

国際医療福祉大学・高邦会グループでは、若く優秀な医師を数多く育て、グループ全体の医療の質を高めるため、臨床研修に積極的に取り組んでいる。研修の充実を図るためには指導医の役割が重要であることから、2006年9月より厚生労働省の指針に則った「指導医講習会」を開催し、指導医の養成に力を入れてきた。10月29日(土)、30日(日)の2日間にわたって、国際医療福祉大学成田病院で開催された「第14回臨床研修指導医養成ワークショップ」をレポートする。



### 約7年ぶりの開催となった 臨床研修指導医養成ワークショップ

指導医数が約300人程度確保できていたことから、しばらく開催を見送っていた臨床研修指導医養成ワークショップ。2020年に国際医療福祉大学成田病院が開設され、新しい医師が数多く入職してきたことから再開を望む声も多くなり、今回約7年ぶり第14回目となる「国際医療福祉大学・高邦会 臨床研修指導医養成ワークショップ」を開催することとなった。

冒頭、今回参加した当グループの医師19人を前に、講習会主催責任者(ディレクター)を務める宮崎勝国際医療福祉大学成田病院院長(国際医療福祉大学副学長)は、「当グループの臨床研修の質のさらなる向上のために、ご参加いただいた先生方には教育の面でぜひお力添えいただきたい。ご自身の教育に対する姿勢を改めて見直す機会として、このワークショップを役立ててほしいです。ご参加の先生方は、お互いの立場を超え、フラットな関係性のなかで学んでいただければと思います」と挨拶をした。

同じくディレクターを務めた三浦総一郎大学院長は「厚生労働省の新臨床研修制度は2004年に創設されま

した。医学・医療は日々進歩してきたものの、はたして医師教育は同じような進歩を遂げてきたのでしょうか。忙しい毎日のなかで、覚えることも教えることも多いなか、どのように教育に携わっていくか迷うことも多いと思います。この研修を通じ、教育のスキルもプロフェッショナルとして磨いていただきたいです」と述べた。

### 熱い議論が交わされた2日間 研修と同時に医師同士の交流の場

ワークショップでは、いわゆる講義形式ではなく、グループワークやロールプレイといった手法を通じて、研修医の指導に必要とされる研修プログラムの作成や指導医の役割、心のケアなどを学ぶ。大和田倫孝国際医療福祉大学病院特別顧問をチーフタスクフォースとして、豊富な経験を持つ4人のタスクフォースによる情熱的な指導のもと2日間の講習が行われた。1日目には厚生労働省関東信越厚生局臨床研修審査専門官の吉澤大氏による「臨床研修制度の理念と概要」についての講演が設けられた。グループワークでは「問題の共有化」「困った研修医への対応」「指導医の在り方・役割」等のテーマについて参加者自ら考え、発表や討論に熱心に取り組んだ。2日間で16時間を超えるハードな講習だったが、全員が新たに指導医資格を得るための受講を修了した。

参加者からは「明日から実践できることも多かったので、研修医や後輩の教育に役立てたい」「研修医との接し方に悩んでいたが、これだけ考えて教育に携わらねばならないとわかり勉強になった」「タイトなスケジュールで少し疲れたが、グループの先生方と交流できてよかった」といった感想が聞かれた。

最後にチーフタスクフォースの大和田特別顧問から19人の参加者に修了証が授与され、第14回臨床研修指導医養成ワークショップは終了した。

今後もこのワークショップは定期的開催される予定で、次回開催については年度内をめざし調整している。臨床研修のさらなる充実のため、グループの医師の積極的な参加が期待される。



## 2022年度 国際医療福祉大学 合同慰霊祭及びご遺骨返還式

11月5日、成田キャンパスにて『2022年度国際医療福祉大学合同慰霊祭及びご遺骨返還式』を、ご遺族、教職員、学生などの参列のもと、挙行した。

ご献体は死後、自分の遺体を医学生たちの解剖学実習のために提供することを生前に登録、亡くなった後に遺族が医学部に遺体を提供するもので、実習を通して医療従事者として育ち活躍することにつながる、医療従事者と患者様との信頼関係の原点といわれる。

合同慰霊祭ではご遺族、教職員、学生など約250人の

参列者全員で、医学教育、研究のためにご献体された方々に黙祷を捧げた。続いて、鈴木康裕学長が追悼のことば、河上裕医学部長がお礼のことば、さらに医学部3年生が学生代表として感謝のことばを述べた。そして、参列者全員が一人ひとり、祭壇に献花した。

合同慰霊祭に引き続きご遺骨返還式を行い、献体の会の代表を務める河上医学部長からご遺族にご遺骨を返還。最後に、解剖学の小阪淳教授の挨拶で閉会した。

(広報 城貴弘)



## International University of Health and Welfare IUHW CONTENTS vol.131 November 2022

### 2~3 特集1 第12回国際医療福祉大学学会学術大会

### 4~5 特集2 感染症対策のなか各キャンパスで開催！ 大学祭特集

### 6 2022年度IUHW奨学金授与式 東京赤坂キャンパスで開催

### 7 モンゴル国立医科大学創立80周年記念共同医療シンポジウム

8~9 トピックス 東医体で水泳部、ボート部躍動/学生ボランティアサークル、食品や文具を地元へ寄贈/令和4年度成田市消防団女性部 辞令交付式を実施/那須シミュレーション医学センターで医学部生「縫合コンテスト」/令和4年度大田原キャンパス関連職種連携実習報告会/東京赤坂キャンパスで大学祭企画と兼ねた記念講演会

10~11 キャンパスレポート 成田キャンパス: TEDx IUHWNarita 2022/大田原キャンパス: 骨髄バンクドナー登録に貢献で栃木県知事から感謝状/大川キャンパス: 相次ぐ教授陣の研究成果の論文発表・掲載/東京赤坂キャンパス: 病院実習報告会開催/小田原キャンパス: 関連病院説明会開催

12~13 施設インフォメーション 成田病院/国際医療福祉大学病院/三田病院/熱海病院/市川病院/塩谷病院/医療法人財団順和会

### 14 第14回臨床研修指導医養成ワークショップ

### 15 2022年度合同慰霊祭・ご遺骨返還式

16 キャンパスプラス1 クラブ・サークル紹介 ダンス部(大川キャンパス)

大川キャンパス編

ダンス部

経験や学科・学年を越えて  
イベント出演に向けて練習

こんにちは。大川キャンパスダンス部です。

私たちは、現在、1年生と3年生の23名で活動しており、初心者から経験者まで幅広いダンス歴の部員が在籍しています。週に1回2時間という限られた時間ではありますが、学科・学年・経験問わず、仲良く賑やかな雰囲気です。また、コロナ禍での活動ということで、マスクの装着、手指消毒、検温、換気を行うなどの感染対策を徹底しながら、活動しています。

主な活動は、週1回の練習、学校行事・地域行事への出演です。練習内容は、イベント出演に向けた作品作りに加えて、基礎練習としてストレッチ、アイソレーション、リズムトレーニング、ステップ練習。応用練習として振り付けの練習を行い、スキルアップに向けて取り組んでいます。10月8日(土)の大川キャンパス大学祭「月華祭」で発表したほか、12月のクリスマスイベント出演に向けて練習しています。

ダンスを通じた人との出会いを大切に  
部員全員で部活動を楽しみたい

特に地域行事への出演は、地域の方々との貴重な機会ですので、挨拶などのコミュニケーションを大切にしています。また、ステージに立ち、人前で踊ることはなかなかできない経験ですので、イベント出演



●初心者・経験者の垣根もなく仲の良い部員たち

依頼をくださる主催者様や、地域の方々に対し感謝の気持ちを持ち、一つひとつのステージを踊っています。このような部活動やイベント出演の活動を通して、ダンス部では主体性や協調性、度胸を身につけることができると感じます。

コロナ禍での活動ということで、新入部員が集まらず、苦労もしましたが、呼び込みのポスター制作等を頑張った結果、現在は部員も増え、楽しく部活動ができています。これからもダンスを通じた人との出会いや、自分自身の成長を大切にして、部員全員が楽しめるダンス部にしていきたいと思っています。

福岡保健医療学部 理学療法学科3年  
岡田紋奈



●10月8日(土)に行われた大学祭「月華祭」での発表



●多くの観客の前で堂々とダンスを披露